

『ブラジリダーデ』の文化的性格

住 田 育 法

はじめに

本稿の表題においてまず問題となるであろう文化の内容と定義については、様々な解釈が出されているが、筆者は、いわゆるこの分野における西南学派、すなわちドイツ文化哲学派の立場に立って論じるものである(1)。

ブラジルの歴史的過程において、その政治、社会、文化に関連してしばしば用いられる『ブラジリダーデ』については、その意義がいまひとつ明確ではない。この理由としては『ブラジリダーデ』が漠然と「ブラジルのもの」と解釈されている(2)からである。すなわち、第一には、『ブラジリダーデ』という言葉そのものの概念規定が不明確であり、第二に、ブラジルのものとは何かを極めて説明しがたいという二点であるが、あえて筆者は、これをブラジル主義あるいはブラジル化運動と解釈して本稿の問題としたいのである。

上記の内容については、以前、ブラジル帝制期から旧共和制期にまたがる時代を、ブラジルのものを創造する時代として扱った(3)。その中では、政治的、経済的近代化の問題と並んで、ブラジル人の自国文化に対する自覚のたかまり(4)―これはとりもなおさずブラジルのものの高揚と解釈される―がみられることが、研究の結果理解された。特に旧共和制時代において『統領政治』を造出したカンボス・サーレス(Campos Sales)大統領(1898～1902年)からエピターシオ・ペッソア(Epitécio Pessoa)大統領(1919～1922年)にかけての時期、自国文化に対する意識のたかまりが、後述するように、文化の一面を代表する文学作品の中に具体的な現われをみせはじめたのである(5)。それは言語の面ではブラジレイリスモといわれるブラジル語法の問題であり、またそれまではあまり扱われなかった郷土愛を中心とする北東部およびその奥地の地方的性格を強くうち出した作品であり、そしてサン・パウロを中心としたモデルニズモ運動―統合主義運動―のおこりなどを包含するものである。

またブラジルの性格を意味する「ブラジリダーデ」という語も、旧共和制時代に続く新しい時代の独裁者ジェツリオ・ヴァルガス（Getúlio Vargas）によって強く取り上げられたのである。このヴァルガス期—新国家体制（Estado Novo）の出現—をもって、ブラジリダーデの理想的完成期とみなすものである（6）。

具体的には、旧共和制時代および第二共和制時代—ヴァルガス時代—までの文学作品への接近を試みることによって、「ブラジリダーデ」の発足から成長、完成への過程を要約的に研究し、サン・パウロおよびその他の地方の知識階層がどのような理念また感覚—各地の写実的描写—をもっていたかを理解しようとしたものである。

また、国民文化の伝達手段としての言語の問題—ブラジル語法の問題について—にも必要に応じて触れたのである。

〔註〕

- (1) ドイツ文化哲学派は、ウィンデルバンド（Wilhelm Windelband）およびリッケルト（Heinrich Rickert）に代表される。彼らは、文化とは、人間が与えられた歴史的過程ならびにその場所において創造したすべてのことを包含するものである、と解釈している。
- (2) ブラジリダーデ（brasilidade）を辞書で引けば、「ブラジルおよびブラジル人に関する特徴的な性格」と書かれている。斎藤広志教授も、ブラジリダーデを「ブラジルらしさ」、「ブラジルのもの」、「ブラジル精神」と解釈しておられる。（斎藤広志「バルガス以後—ブラジルの政治と社会（1930～1969）」ラテン・アメリカ協会、1970年、100～101ページ。同「ラテンアメリカ現代史Ⅰ 総説・ブラジル」山川出版社、1978年、238ページ。）
- (3) それは次の二論文においてである。「“ブラジル奴隷解放”の歴史的意義」『経済学論叢』（同志社大学）第24巻1・2・3号、1976年、298～341ページ。「ブラジル旧共和政体期の一考察—そのエリート体制の構造的分析」『COSMICA』（京都外国語大学）第Ⅶ号、1978年、111～150ページ。
- (4) この背景には、XIX世紀末から急速に高まってきたイタリア人、ド

イツ人、スペイン人等を中心とした外国移民の増加が考えられる。

- (5) 筆者は以前に、「ブラジル語法」に関する次のような研究を行なっている。「“ブラジル語法”と<弱勢代名詞の位置>とについて」『COSMICA』（京都外国語大学）第V号，1976年，46～60ページ。「ブラジルにおけるポルトガル語 —その文化的様相に関する一試論」『COSMICA』第VI号，1977年，187～210ページ。
- (6) 「ブラジリダーデ」の理念は、ヴァルガスの死後も、ブラジルの政治、経済、文化等のあらゆる方面においてひんばんに用いられているから、ヴァルガス期を完成期とみなしたのである。

第一章 植民地時代の伝統

文学作品への具体的な分析に入る前に、ここでまずポルトガル文化を根源とするブラジル社会の植民地時代の状況を瞥見する必要がある。

XV期紀末、人口150万に満たないヨーロッパの弱小国ポルトガルが、先覚者エンリケ王子の指導のもとに強国イギリス、フランス、オランダ等にさきがけて前人未踏の航海に乗り出し、またたくうちに教皇の権威によって世界の未知の領域をスペインと二分するまでに至ったことは、世界史の転換期を特色付ける実に興味深い出来事であった。この背景の第一は、ポルトガルがヨーロッパ大陸の西の外れに位置し、その国土が極めて狭隘で資源も貧困であることがあげられる。これがポルトガル人をかくも危険な航海に駆り立て、結局は彼らの誇りを世界的水準にまで高めた行動となったのである。第二には、人口の寡少さが、エンリケ王子死後のアジアでの植民地獲得競争における敗退を早め、一方、新世界ブラジルにあっては、インディオおよびアフリカ人を労働に用いる独自のポルトガルの植民形態を生んだ(1)ものといえよう。

ポルトガル王室は最初ブラジルに封建制を再建しようとした失敗後、これを広く庶民に開放して、渡航の奨励および移民の優遇などによって、植民地ブラジルの開拓者を獲得し、またその体制を堅固にさせていったのである。次いでスペイン領大平洋岸での大量の金発見に刺激された新渡航者たちは、すでにポルトガル王室の指導のもとに広大な土地が分け与えられているブラジルにあっては、いわゆる奥地探険隊(Bandeirantes)となって貴金属の発見を目標とし

て積極的に各地に拡がっていったのである(2)。彼らの具体的な活動は、金の発見と砂糖地主に買却するためのインディオの捕獲(3)であったが、金時代の到来はXVII世紀になってからであり、それまでは、熱帯のジャングルを舞台として、人種的また文化的に混ざり合いながらのインディオとの共同生活が展開したのである(4)。これより先に大西洋沿岸地帯ではブラジル木の絶滅後、砂糖産業が序々に発達した。これに必要とする資本ならびに技術はオランダから借り入れ、労働力には、ポルトガル商人によって独占されていた黒人奴隷が充てられたのである。この砂糖産業は、XVII世紀の金、XIX世紀のコーヒーの登場までの約200年間、ブラジル植民地経済を基本的に支えていたのであるが、この砂糖農園社会において、ブラジル文化の最も重要かつ伝統的な部分が形成されたのである。すなわち、言語、宗教—特にイエズス会の指導のもと(5)に一などで代表されるポルトガル文化が、新世界の熱帯的環境の中で、農園また家庭奴隷であるアフリカ人の文化と混濁して独自の文化を形成しはじめたのである(6)。もっとも交通の極めて不便なこの時代においては地域的文化が強力に発展していくことは当然の推移であった。

以上のことからまず、次のことがいえよう。ブラジル奥地では貴金属を求める活動がインディオとの接触と平行して領土的拡張を押し進め、一方、海岸地帯においては、黒人奴隷制と大土地所有制とに基づく砂糖経済が発達し、これが大西洋をはさんでのアフリカ、ブラジル、ポルトガル三地域の交流を活発化させたのであり、熱帯ブラジルにおいてポルトガル文化が、新しい人種—アフリカ人およびインディオ—とその文化を取り入れながら成長したのである。

越えて、XVIII世紀のミナス・ジェライスを中心とした金の発見およびそのブーム(7)—約半世紀—にあっては、いよいよブラジルに生まれ育った人々とただ富—特に金—を求めてやってくる龐大な数のポルトガル人との間に対立が生じはじめ、エンボアーバス(os emboabas)の乱やマスカッテス(os mascates)の乱など(8)、鉱山地域を中心として各地に武力衝突がおこったのである。このようにそれまではスペイン人やその他の国に対して起ったポルトガル人としての民族意識が、今度はブラジル人とポルトガル人という対立関係の中でブラジル人としての意識へと変化してきたのである。

XVII世紀第二半期に登場したポルトガルのジョゼI世治下の大宰相ポンバル公爵(Marquês de Pombal)がとったポルトガルとブラジルとの融和政策の

短期間の実施後、ジョゼⅠ世死去を契機として、反動的な大貴族によって取り囲まれたマリアⅠ世のもとにおいては、強固な植民地政策がとられ(9)、ブラジル人のポルトガルに対する反感が強められたのである。ついにミナスの住民チラデントス(Tiradentes—Joaquim José da Silva Xavier)を指導者とした独立運動が勃発し、これは首謀者が本国の命令で絞首刑に処せられはしたが、続くXIX世紀初頭におけるブラジルの政治的独立の指導理念となったのである。このように植民地支配の長期化と隷属状態に対して次第に経済的発展をみせ生活に自信を得てきた大地主層を先頭としたブラジル人の反抗が、ブラジルを独立へと導いていったのである。しかし、1822年に達成された独立は、ブラジルに居住しているポルトガルの王子ドン・ペドロ(D. Pedro)によって成されたのであり、独立に伴う流血をみることなしに、極めて平穩のうちに、以後1889年まで続くブラジル帝制が樹立されたのである。従って、植民地時代の伝統—大土地所有制的形態—が破壊されることなく、帝制時代においても維持されたのである。もちろん摂政時代に続く第Ⅱ帝制期に入ると、ブラジル社会は大きな曲り角を迎えることになった。すなわちブラジル文化の基層を成したアフリカ人奴隷貿易の禁止と奴隷制度の段階的廃止が進められ、他方では新しく登場する欧州移民の導入が行なわれたのである(10)。移民に伴う人口増加と国内における耕作可能地の相対的な狭溢化傾向との矛盾が、唯一の発展ルートである南部を舞台に、やがてブラジルを外戦へと導いてゆく—特にパラグアイ戦争(1865～1870年間)—が、この周辺諸国との戦争状態が継続して、強力な軍部を生み、その後、彼らの手によるナショナリズム運動が盛り上がるのである。この外戦は経済的にはほとんど得るところがなく、反転して、国境の確立とともに国内を充実することに向かい、「ブラジリターデ」が内からの運動となっていくのである。戦争への国民の総動員は、黒人奴隷を軍隊に動員することによって、黒人奴隷解放の一因ともなったのである。一方、奴隷解放という労働体制の変化は、コーヒー栽培の最適土壌であるテラ・ロッシヤに関する条件も影響して、経済の中心地がリオ・デ・ジャネイロからサン・パウロへ移行する(11)新しい勢力分布を生んだのである。なお、このコーヒー産業の発展は、ブラジルの最重要産業となって、将来のブラジルを1930年まで指導したのである(12)。時代の変化に伴う奴隷解放と大地主層の反発、皇帝ドン・ペドロⅡ世の反戦思想と陸軍の不満、さらに旧教の硬直

化などによる国民的反乱がついに帝制を崩壊させ、共和制の誕生を招き、ポルトガルの血統を継ぐブラガンサ家とは違い、ブラジル人によるブラジル国家の建設という時代が到来したのである。特に政教分離 一教会領の没収一、貴族制の廃止、ドン・ペドロⅡ世および有力貴族のポルトガルへの送還などによってブラジルのポルトガルからの完全な遊離がなされ、革命的な体制変更が行なわれたのである。結局ここに、リオ・デ・ジャネイロおよびサン・パウロを中心とした新しい政治、文化の高まりをみるのであり、同時に、「ブラシリダーデ」を強調する運動も、この時期に盛り上がってくるのである。

〔註〕

- (1) 参照；今西正雄「“ブラジル政治・経済”論 一社会・経済史の立場から」『研究論叢』（京都外国語大学）第XVII号，1976年。
- (2) 1980年から1640年までポルトガルがスペインに併合されたことが、新世界ブラジルにおいては、ポルトガル人が国境を越えて自由に活動することに有利な環境を与えた。
- (3) もちろん砂糖農場の労働力には、アフリカから輸入される黒人奴隷が充てられたが、極めて高価であるため、家内奴隷等にはインディオが使われることがあった。
- (4) 参照；Cassiano Ricardo, *Marcha para Oeste : A influência da “Bandeira” na formação social e política do Brasil*, 2 vols, 4ª ed., Editora da Universidade de São Paulo, Rio de Janeiro, 1970.
- (5) イエズス会士の活躍は、特に奥地のインディオの教化活動においてであったが、その目標は、世界的規模での宗教的統一であった。
- (6) 参照；Gilberto Freyre, *Casa Grande & Senzala : Formação da Família Brasileira sob o Regime de Economia Patriarcal*, 2 vols, 12ª ed., Rio de Janeiro, 1964.
同書から理解されるのは、植民地時代のブラジル社会においては、階級性が極めて柔軟であったことである。その顕著な現われは、ポルトガル人のインディオおよびアフリカ人との乱婚である。
- (7) 金以外にダイヤモンドも発見されるが、これは、王室の独占下に置かれ、

ブラジル経済には何ら貢献しなかった。

- (8) エンボアーバとは、サン・パウロの住民が、余所者、特にポルトガル人に対して用いた蔑称であり、マスカッテは、オランダの住民が、レシーフェの商人、これも特にポルトガル人に対して呼んだものである。

XVII世紀初頭、ポルトガル王室は、本国人にとって有利な植民地政策を行っていたが、このことへの反発が、この二つの反乱を引き起した。まず第一のエンボアーバスの乱は、1709年、サン・パウロ住民と余所者エンボアーバスが金鉱山の獲得をめぐる行なった戦いであり、武力衝突ではエンボアーバスが勝ったが、結果的には、これによってサン・パウロおよびミナスデオウロ・カピタニアが創設され、サン・パウロは町から市へ昇格した。もう一方のマスカッテスの乱は、1709年から1711年にかけて、ペルナンブコのオランダの住民とレシーフェの住民との間で交された戦いであるが、これを契機にペルナンブコ・カピタニアの中心地は、オランダからレシーフェに移行した。

- (9) 参照；今西正雄「重商・重農主義下のブラジル — 1785年の“工業禁止勅命”をめぐる」『経済学論叢』（同志社大学）第18巻第1・2・3号，1969年，49～88ページ。
- (10) 参照；拙稿「“ブラジル奴隷解放”の歴史的意義」『経済学論叢』第24巻第1・2・3号，1976年。
- (11) 当時のブラジルの輸出商品中、コーヒーの占める割合は、総輸出額の60%以上を維持し、これが最良の工業製品獲得手段であった。
- (12) 参照；富野幹雄「ブラジルのコーヒー生産の消長をめぐる諸問題 — 第二次世界大戦までの期間」『アカデミア』（南山大学）第29号，1979年，185～202ページ。

第二章 文学作品を通して見たブラジリダーデ

第一部 文化の一端をになうブラジル語法について

前章では本テーマに関する社会的、政治的背景を述べたから、いよいよ文学

作品を中心として、「ブラジリダーデ」を通観してみよう。

ポルトガルで用いられるのとは異なった表現を強調することで、まず「ブラジリダーデ」は文学作品に現われてくるのである。ややわき道にそれるが、語法の面からこの状況を説明してゆきたい。

1888年に、ブラジルの語学者アントニオ・ジョアキン・デ・マセード・ソアレス（Antônio Joaquim de Macedo Soares）が彼の著『ポルトガル語ブラジル辞典（Dicionário Brasileiro Língua Portuguesa）』で「すでにブラジル人には、ポルトガルで書かれるようにはなく、ブラジルで話されるようにポルトガル語を書く時期が到来した」と述べている。要するに、ポルトガルに比較して「より自由な語法」を用いるという問題であり、文学作品では、若干歴史をさかのぼるが、第二帝制期（XIX世紀後半）においてすでにロマン主義文学の巨匠ジョゼ・デ・アレンカル（José de Alencar）が、彼の代表作O Guaraniを旧版から新版に改めるに際して、例えば「弱勢代名詞」の省略、その位置の書換えなどを行なっている。アレンカルは、こうした省略や書換えを故意に行なうことによって、努めてブラジルの語法を強調したといわれている^①。さらに彼の1871年のO Tronco do Ipêにも、多くの「ブラジル語法」を見出すことができる^②。

こうした「ブラジル語法」の状況と自国文化への意識のたかまりとを反映して、1890年代から1900年代にかけてポルトガルの文法家カンディド・デ・フィゲイレード（Cândido de Figueiredo）とブラジルの詩人パウリーノ・デ・ブリト（Paulino de Brito）が、〈弱勢代名詞の位置〉の「より自由な用法」について議論を闘わせたのであるが、以下、その内容を簡単にみておきたい^③。

この論争は、XIX世紀末（1891年頃）、ブラジルのある詩の一行“Um soneto pediste-me, criança.”が、カンディド・デ・フィゲイレードによって〈弱勢代名詞の位置〉において誤りであると指摘されたことを契機として始まった。彼の批判は、「Um soneto pediste-me……はブラジル語法であるが、これは、Um soneto me pedisteあるいはPediste-me Um sonetoに取り代えられなければならない。（なぜなら、小辞Um sonetoは弱勢代名詞を引き付けるのであるから）」というものである。

彼の意見に対してブラジルの詩人パウリーノ・デ・ブリトは、次のように反

論している。

「＜弱勢代名詞の位置＞の問題は、わが国（ブラジル）の散文家や詩人達の情緒に係わる問題であって、ゴンサルヴェス・ディアス（Gonçalves Dias）が“inda sorrir-se de amor”と、ジョゼ・デ・アレンカル（José de Alencar）が“Alice não ocupou-se mais senão dele”と書いていることは、彼らが無学であるとか、不注意であるとかを意味しているのでもなければ、優れた語法を軽んじているからでもない。むしろ逆に、文体を修正し完全なものにしようとするに他ならない。」さらに彼は、ポルトガルでは、“Quem me procurou？”“Foi ele que me deu.”“Parece-me que vai chover.”と用いねばならないであろうが、ブラジルでは、“Quem procurou-me？”“Foi ele que deu-me.”“Me parece que vai chover.”と用い得ると述べている。

こうした主張に対してポルトガルの文法家カンディド・デ・フィゲイレードは次のように手厳しく反論している。

「実際、パウリーノ・デ・ブリトは、時に、原則や優れた大家の用法を忘れ、彼の土地（ブラジルのパラ州）の卑俗な訛りに犯されて、次の如く書いている。“Justo é … que o devedor /… torne-se escravo.”（Cantos Amazônicos, Pará, 1900, P.13）。美しいポルトガル語であれば当然次の如くに書かれるべきであろう。Justo é que o devedor se torne escravo. と。」

＜弱勢代名詞が文頭に位置する＞用法については次の通りである。

「この用法はアフリカ言語から派生したものである。それは、黒人達の働くゴム園やコーヒー園において農夫や植民者達の聴覚を傷付けながら定着してゆき、ついには都市にまで伝播し、ブラジルの文法学者が規則を確立しようとした時には、すでに手遅れとなっていたのだ。」と。

こうした「ブラジル語法」を擁護する立場と、ポルトガルとは違った使い方であるために誤りであるとする文法的厳正主義の立場とからの議論は、「ブラジルのポルトガル語」に関するより専門的な研究へと展開してゆくのである。そこでいま、主要な語学者の代表的研究をみてみよう。（各数字は初版発行年である）。

まず、1920年にはアマデウ・アマラル（Amadeu Amaral）が『田舎方言（O Dialecto Caipira, São Paulo）』についての研究を発表した。これは、

サン・パウロ奥地の村落共同体住民から、インディオおよびアフリカ言語の影響を受けているとされる民俗学的に意味のある言語現象を採集し、分析したものである。

次いで1922年、当時のリオ・デ・ジャネイロ市民の言語を研究したアンテノール・ナセンテス (Antenor Nascentes) の『1922年におけるカリオカ語 (O Linguajar Carioca em 1922, Rio de Janeiro)』が出版された。ナセンテスは1928年には、ポルトガル語文法書『国語 (O Idioma Nacional, Rio de Janeiro)』を発表している。続く1931年には、サイド・アリ (Said Ali) が『ポルトガル語文法史 (Gramática Histórica da Língua Portuguesa, São Paulo)』で、「ブラジル語法」について詳しく触れている。

さらにジョアン・リベイロ (João Ribeiro) は、第二版が1933年である『国語 (A Língua Nacional, São Paulo)』の中で、「ブラジル語法」の諸現象を幅広く説明しているが、先に述べた<弱勢代名詞の位置>に関する意見では、次のように激しい口調となっている。

「ブラジルの会話的語法で一般的な、“Me diga” “Me faça o favor”のように弱勢代名詞が文頭に位置する用法は、ポルトガルで用いられる“Diga-me” “Faça-me” が厳格で命令的であるのに比べ、より優しく甘く、依頼の気持の現われた表現である。そして、ブラジル人がSafa-se / Raspe-se / Suma-se / というとなれば、相手に立ち去ることを命令する時に限るのである。……

“Me passe os cobres”は親切に集金する折の極り文句であり、“Passe-me os cobres”はすでに乱暴な司法的、軍隊的通告である。この二つの文体をただ一つのものに単純化してしまうことにおいて、つまりこの二つの異なった感情を一つの表現に縮めてしまうことにおいて、私達 (ブラジル人) はいかなる利益を得るというのか。一体、国語の純粹 (ポルトガル語法 portuguesismo) への愛着は、いかなる魂の犠牲をも厭わないのであり、その結果、アメリカの空の下に培われた色調 (個性) は色あせていく。(4)」

1934年にはマリオ・マロキン (Mario Marroquim) が『北東部 (アラゴアスとペルナンブコ) の言語 (A Língua do Nordeste : Alagoas e Pernambuco, São Paulo)』という先に説明した『田舎言語』ならびに『カリオカ言語』に続いて、ブラジル方言学の立場からの研究を発表した。このように、ブラジルの知識人によってそれまではあまり取り上げられなかった地方の言語の研究が、

積極的に進められたのである(5)。これに続く、ブラジル全体を包含する言語事象および文法に関するより科学的な研究については、後述する文学作品の歴史的展開を1938年までとしたのに比較して、一応1950年まで見ることにした。

まず1937年の新国家体制(Estado Novo)樹立直後の1938年に、イズマエル・ダ・リマ・コウティニョ(Ismael da Lima Coutinho)が『文法史(Gramática Histórica, Rio de Janeiro)』の中で「ブラジル語法」を文化史および文法論の立場から説明している。次いで1943年にグラッドストーン・シャヴェス・デ・メロ(Gladstone Chaves de Melo)が『ブラジルの言語(A Língua do Brasil, Rio de Janeiro)』を、1950年にはセラフィン・ダ・シルヴァ・ネト(Serafim da Silva Neto)が『ブラジルにおけるポルトガル語研究入門(Introdução ao Estudo da Língua Portuguesa no Brasil, Rio de Janeiro)』を出版しているが、これらはいずれも、ブラジルのポルトガル語をより統合的な立場から科学的に分析したものであって、先に示したカンディド・デ・フィゲイレードとパウリーノ・デ・プリトにみられたような感情的な主張は影をひそめたのである。そして「ブラジル語法」研究は、ヴァルガス自決以後の1959年における「ブラジル文法命名法」の制定、そして1967年に提案され1970年以後全国的な規模で展開する文盲撲滅運動(MOB RAL)へとつながっていくのである。

〔註〕

- (1) 参照；Aloízio Manna, Os Pronomes pessoais átonos em duas edições de "O Guarani" de José de Alencar, Departamento de Lingüística e Filologia do Instituto de Letras da U.F.F., Niterói, 1971.
- (2) 参照；Maximiano de Carvalho e Silva, Registro filológico da edição crítica do romances, O Tronco do Ipê de José de Alencar, Melhoramentos, São Paulo, 1972.
- (3) カンディド・デ・フィゲイレードとパウリーノ・デ・プリトとの論争については、拙稿「“ブラジル語法”と<弱勢代名詞の位置>について」(『COSMICA』第V号, 1976年。47~52ページ)

に詳述してある。

(4) 参照：João Ribeiro, *A Língua Nacional*, 2ª ed., São Paulo, 1921. PP. 11 ~ 12.

(5) 1965年にはネルソン・ロッシ (Nelson Rossi) によってパイア方言の音韻学的研究『パイア地方の会話的語法に関する予備的地図 (Atlas Prévio dos Falares Baianos)』が発表されている。

第二節 地方主義と統合主義

文化は人間が創造するものであるが、同時に、環境からの影響をも無視することができない。しばしば陸の孤島と呼ばれ、また過去の伝統を根強く残すブラジルの内陸部においては、ポルトガル文化がブラジル化しつつ地方文化として温存され、これが、文化的活動としての文学作品に現われてくる。これに対して、幾多の欧州文化を吸収したりリオ・デ・ジャネイロおよびサン・パウロについては、さきの地方的文化を取り入れつつ、ブラジル産業の代表ともいべきコーヒー産業の急台頭を背景に、ブラジル政界の覇権を確立しながら、ブラジル文化を新たに統合せんとする強力な動きが見出されるのである。

そこで前節では、言語に現われた「ブラジリダーデ」について考察したが、本節では、以下の主要な作家の代表的作品を取り上げ、時代的立場から分析しようとするものである。

さて、扱った著者と作品は以下のとおりであるが、いずれも、初版以来現在まで、版を重ねその影響は極めて広範に及んだ作品である。

1. アルイージオ・アゼヴェード『オ・コルチッソ』初版：1890年。
2. エウクリエス・ダ・クニャ『オス・セルトンエス』初版：1902年。
3. グラッサ・アラニャ『カナアン』初版：1902年。
4. モンテイロ・ロバート『ウルペス』初版：1918年。
5. マーリオ・デ・アンドラーデ『マクナイーマ』初版：1928年。
6. ジョゼ・アメリコ・デ・アルメイダ『搾り滓置場』初版：1928年。
7. ラッシュェル・デ・ケイロス『15年』初版：1930年。
8. ジルベルト・フレイレ『大邸宅と奴隷小屋』初版：1930年。
9. ジョゼ・リンス・ド・レゴ『砂糖きび叢書』初版：1932年～1936年。

『砂糖農園の少年』初版：1932年。

『愚か者』初版：1933年。

『旧式砂糖工場』初版：1934年。

『黒人リカルド』初版：1935年。

『砂糖工場』初版：1936年。

10. ジョルジ・アマード『ココア』初版：1933年。

『汗』初版：1934年。

11. グラシリアーノ・ラモス『旱魃下の生活』初版：1938年。

ここで個別的に作品の検討に入っていこう。上記のアルイージオ・アゼヴェード(2)の代表作『オ・コルチッソ』は、ブラジル独立以来の政治と商業の中心地リオ・デ・ジャネイロ市およびその周辺地域を舞台としており、題材は、その大都会の貧民街コルチッソにおける移民を含めた貧民の日常生活であり、特に、ポルトガル移民たちのブラジル化してゆく様子が、克明に描かれている。

作品には実に多くの人物が登場するが、今ひとりのポルトガル人—ジェロニモ—についての場面を取り上げ、本作品の思想の一端を紹介しておきたい。

「数週間がたった。ジェロニモは今では、毎朝、リチーニャのように非常に濃い一杯のコーヒーをすすり、寒気を断つためにツー・フィンガーの火酒を一気に飲む。……

かくして、少しずつ、彼のポルトガル村民としての飾り気のない習慣が変化していった。すなわちジェロニモはブラジル化した(abrasi lei rou-se)のである。彼の家は、蔭気で、悲しみを一点に集めたあの雰囲気を失った。すでにそこには、幾人かの裏長屋の住人が、暇な時間に雑談をしに現われたし、日曜日には、夕食をとりに人々が集まった。結局、変革は完全であった。すなわち、ぶどう酒の代りに砂糖きびの火酒が飲まれ、マンジョカ粉がパンケーキの代りに、干し肉と黒豆の煮込みがじゃがいもと玉ねぎで煮たたら料理の代りにそれぞれ食べられるようになった。胡椒や唐辛子は完全に食卓を支配した。野菜やパンやぶた肉から作られたポルトガル風のスープは、パイア料理やムケカ、ヴァタパー、カルルなどのブラジル料理によって退けられた。……興味深いのは、彼がブラジルの風俗習慣にのめりこめばのめりこむだけ、彼の体力の低下にもかかわらず、彼の情緒がより純化されていくことである。今、彼の耳は音楽に対して決して粗悪ではなく、悲しい愛がヴィ

オラで歌われる時、彼は、奥地の人々が詩に寄せた思いまでをも理解したのである。(3)」

この作品は、ブラジル社会の最低辺の階級間における「ブラジリターデ」を示唆するものである。

『オ・コルチッソ』が出版された8年後の1902年には、有名なエウクリーデス・ダ・クーニャ (Euclides da Cunha) (4) 著『オス・セルトニイス (Os Serfões)』とグラッサ・アラニーャ (Graça Aranha) (5) 著『カナアン (Canaã)』が出版された。前者では1896年のバイア州奥地に勃発したカヌードスの乱が題材となっており、これは、地方主義の代表的作品とみなされる。一方、後者は、エスピリトサント州開拓地のドイツ系移民の生活を描いており、国家主義—近代主義の先駆的作品となっている。

まず『オス・セルトニイス』をやや詳細に紹介すると、その背景はカヌードスの乱 (Campanha de Canudos) であり、内容は、カヌードスの地理および地質ではじまり、反乱の主謀者アントニオ・コンセイロの死亡でもって終わっている。この作品では、北東部奥地の地理的環境ならびにならず者 (Jagunço) を含めた奥地の人々の日常生活が描写されており、その意義は、ヨーロッパ文化からの強い影響を受けるサンパウロおよびリオ・デ・ジャネイロの住民—特に知識階層—に対して、反発を含んだブラジル北東部奥地の実体を生々しく表現して提示したことにあるといえよう。カヌードスの乱は、政治的には王政復興、また精神的には旧教会の再興を望む北東部奥地の大衆による反乱であったが、結果においては、より近代的な武器をそなえ統率のとれた国軍に破れたのである。しかしこの作品は、すでに指摘したとおり、北東部奥地に根強く潜在した地方主義を中央に知らせる役目を果たしたのであった。

次いで時を同じくして1902年、グラッサ・アラニーャは、『カナアン』を出版した。これはブラジル文学史においては、写実主義と象徴主義とが合流した前近代主義的作品と呼ばれており、ヨーロッパ文化とブラジル文化とを登場する人物に象徴させ、彼らの思想を通して二つの文化を対比させている。

まず最重要人物は若いブラジルの法律家パウロ・マシエルであり、クーニャはその人物をして作者自身のブラジル観およびヨーロッパ観—世界観—を語らせている。さらに二人のドイツ系移民を二つの象徴として設定している。すなわち高慢な態度の生粋のゲルマン思想を持つレンツ (Lentz) は、世界は

戦士にとってこそこちよい住家であり、生活とは戦いであると主張し、ブラジルの思想を持つ夢想家ミルクウ (Milkau) は、愛の原理が私を励まし、慰め、また守ってくれると語る。結局アラニャは、多くの登場人物を通してドイツ系移住地カナアンを賛えさせているのであるが、伝統的な植民地社会の影響を残すブラジル人社会に対するアンチテーゼとして、ドイツ系移民の開拓地社会を設定して、彼らのブラジル社会への適応過程を描いているのであって、ここに『カナアン』が現代ブラジル社会小説の先駆をなしたとされる理由がある。

さきに示したりオ・デ・ジャネイロ市、バイア州北部、エスピリトサント州高地をそれぞれ舞台とする作品に続いて、いよいよサン・パウロ州の奥地を描いた作品が1918年に登場する。作品は『ウルペス (Urupês)』、作者は後のブラジル児童文学の創始者モンテイロ・ロバート (Monteiro Lobato) である。ロバートは、特異な経歴をもち、これは、1882年サン・パウロ州タウバテ (Taubaté) で生まれ、1948年サン・パウロ市で死亡するまで、実業家かつ文筆家として精力的に活動したことである(6)。彼の主作品と目される『ウルペス』は、ロバートがサン・パウロ州奥地のセラダマンティケイラ (Serra da Mantiqueira) の農園主だった頃の作品を集めたもので、内容は、内陸部の文盲ではあるがこれまで見落されていたブラジル国民の一角を形成するカボクロ (インディオまたはインディオとの混血) 一小農民 に関する物語集である。特に、奥地の住民たちの会話的語法をふんだんに取り入れ、厳格な伝統的文法の束縛からの離脱を目標として「ブラジリダーデ」を強調した。ちなみに、前節で触れたようにサン・パウロ奥地住民の言語研究『田舎方言 (Dialecto Caipira)』が出版されたのは、1920年であった。さらに、同じく前節で紹介したポルトガルの文法家カンディド・デ・フィゲイレードは彼の辞書において、700以上の単語を、ブラジル語法としてこの『ウルペス』から採集したといわれる。

『ウルペス』が出版された1918年以後の1922年、サン・パウロにおいては、同年2月開催の「近代芸術週間 (Semana de Arte Moderna)」を契機として、近代主義運動が始まった。このサン・パウロを中心とした新しい文芸運動の産物のひとつが、1928年出版のマリオ・デ・アンドラーデ (Mario de Andrade) (7) 著『マクナイーマ 一国民すべての英雄一 (Macunaíma : O Herói sem nenhum Caráter)』であったのであり、この作品はさきの『

ウルベス』にくらべ、ブラジル文学界にさらに大きな影響を与えたものである。アンドラーデは、1920年に『マクナイーマ』を執筆したが、翌年にアマゾン地方からペルーのイキトスまで旅行し、この体験を生かして1928年に加筆して改めて出版したのである(8)。

この代表作『マクナイーマ』は、次のような書き出しではじまる。

「われわれの英雄マクナイーマは、処女林の奥深くで生まれた。彼は、膚の真黒な、夜の恐怖の息子であった。ウラリコエラの声が聞こえるほどの大きな静寂に包まれたある瞬間、インディオ・タパニューマ族の女が、ひとりの醜い子供を産んだ。その子供がマクナイーマと名付けられたのである。」

以上の引用からも分るように主人公マクナイーマは、密林で生活するインディオの子供であって、彼が、ブラジルの各地方に存在するポルトガル、アフリカ、そしてインディオ文化を起源とする民話の世界にひとりの英雄として登場するのである。内容は、ブラジル各地の巨人また怪物にマクナイーマが果敢に挑戦するというものである。扱われているのは、アマゾン地方が中心であるが、さらに北東部諸州、またリオ・デ・ジャネイロのこともそれらの地方の風俗とともに触れてあるし、彼の活躍した舞台として当然、これ以外の地方も出てくる。この作品には、ブラジル文化の象徴として、サン・パウロでは商業活動およびパンデイランテ、リオ・デ・ジャネイロでは黒人宗教マクンバ、それから北東部のジャンガーダ、カアチンガなど、その他マンジョカ、バナナ、コーヒー、アボガード、カシューナッツ、シュラスコ料理など、またわに、猿、オームなどが幾度も現われている。

ポルトガルについては、カモンイス(Camões)やエッサ・デ・ケイロス(Eça de Queiroz)などの代表的文学者を取り上げ、特に語法の面におけるルジタニア(ポルトガル)とブラジルとの違いを強調している。

結局、アンドラーデは『マクナイーマ』において、ブラジルのあらゆる地方で用いられる庶民の語法を取り上げ、このブラジルの言語をめぐって近代主義論争を指導し、また地方的性格については、各地の生産形態ならびに風俗習慣に注目しながらも、これをブラジル全体をひとつとして統合的に把握しようとした—その代表が英雄マクナイーマであった—のである。

これと競合するかのようになり、1928年、北東部を舞台とする地方主義的作品ジョゼ・アメリコ・ダ・アルメイダ(José Americo da Almeida)著『搾り

滓置場 (A Bagaceira)』が現われ、この作品以後、新国家体制樹立の1939年まで、著名な社会学者ジルベルト・フライレ (Gilberto Freire) の指導のもとに、ラシエル・デ・ケイロス (Rachel de Queiroz), ジョゼ・リンス・ド・レゴ (José Lins do Rego), ジョルジ・アマード (Jorge Amado), グラシリアーノ・ラモス (Graciliano Ramos) たちによる同地域を中心とした地方主義的作品が登場することになる。以下紙数の制限に加えて各作品の背景である北東部の各地方を詳細に検討する余裕がないため、これを整理して一覧表により示すことにしたが、他方では、さきに説明した『マクナイーマ』を「ブラジリダーデ」の高まりにおける頂点と解釈したからでもある。

著者	作品と題材	その地方
ジョゼ・アメリコ・デ・アルメイダ José Américo de Almeida	『搾り滓置場』 A Bagaceira 初版：1928年。 早魃と砂糖きび農園と奥地の住民 (sertanejo)。牧場の住民と砂糖きび栽培地の住民との対立。	P B 州
ラシエル・デ・ケイロス Rachel de Queiroz	『15年』 O Quinze 初版：1930年。 早魃と北東部の風景。北東部における都会の知識人と奥地の牧童との違和感。	C E 中央部のキシヤダ
ジルベルト・フライレ Gilberto Freire	『大邸宅と奴隷小屋』 Casa Grande e Senzala 初版：1933年。 ブラジル人は熱帯的気候とその歴史的背景から性的に傾くという国民性をもつ。ブラジル文化は、アフリカ、ポルトガル、インディオのものが混淆して出来た複雑な文化。	北東部特に P E 州

- ジョゼ・リンス・レーゴ José Lins do Rego
 生：1901年PB
 家父長的かつ伝統的砂糖農園主の家庭で生育。レシーフェ法科大学卒業。シルベルト・フレイレの盟友。北東部地方主義の立場からSPの近代主義に批判的。
- 『砂糖きび叢書』Ciclo da Cana de Açúcar
 初版：1932～36年。
 自伝的小説。砂糖きび農園の変化と崩壊を、少年時代の体験に基づいて描き、砂糖きびの歴史という国民的テーマに文学的意義を与える。作品は次のとおり。『砂糖農園の少年』Menino de Engenho (1932年)，『愚か者』Doidinho (1933年)，『旧式砂糖工場』Bangüe (1934年)，『黒人リカルド』Moleque Ricardo (1935年)，『砂糖工場』Usina (1936年)。
- PB州およびPE州 (レシーフェ市)
- ジョルジ・アマード Jorge Amado
 生：1912年BA — ココア農園。国民解放同盟 (Aliança Nacional Libertadora) に参加、政治的には左翼的であった。階級闘争の見地から北東部社会を描く。
- 『ココア』Cacau
 ココア農園の人々の生活。
 初版：1933年。
 『汗』Suor
 初版：1934年。
 大都会サルヴァドール市の貧民街の人々の生活。
- BA州南部
 BA州サルヴァドール
- グラシリアーノ・ラモス Graciliano Ramos
 生：1892年Quebrangulo — AL。北東部ALの奥地で生育。共産主義運動に参加した。
- 『旱魃下の生活』Vidas Secas
 初版：1938年。
 北東部旱魃地方の人間と社会の宿命論的諸相。ブラジル近代主義小説の代表作。
- AL州とPE州

〔註〕

- (1) 作品の選択には、次の文献を参考としたが、さらに著者が入手し得

たテキストを中心に整理したのである。

1. チャールズ・ワグラー（山本正三訳）『An Introduction to Brazil』二宮書店，1971。
 2. J. フランコ（吉田秀太郎訳）『ラテン・アメリカ —文化と文学』新世界社，1974。
 3. E. Bradford Burns, Nationalism in Brazil. New York, 1968。
 4. Mário da Silva Brito, História do Modernismo Brasileiro : antecedentes da Semana de Arte Moderna, 4^aed., Rio de Janeiro, 1974.
- (2) アルイージオ・アゼヴェード (Aluizio Azevedo) は、1857年、北東部マラニョン州サンルイスで生まれ、故郷での初等教育を終えて後、政治および文化の中心地リオ・デ・ジャネイロへ行き、そこで最初は絵画、次いで文学を勉強した。1881年に *O Mulato* を著わして以来1913年にブエノスアイレスで死亡するまで、14の作品を書いている。作風は、ブラジル・ロマン主義の影響を残しつつも、社会派自然主義を代表していたといわれ、作品では、当時の一般庶民の日常生活が詳細に描写されている。
- (3) Aluizio Azevedo, *O Cortiço*, Edições de Ouro, s.d., pp. 113 ~ 115.
- (4) エウクリエス・ダ・クーニャは、1866年リオ・デ・ジャネイロ州 (Cantagalo) で生まれ、1884年リオ・デ・ジャネイロ市の工芸学校を終えて陸軍に入隊、中尉および技師の身分で退役した。その後サン・パウロへ行き、1896年、エスタード・デ・サンパウロ紙の通信員としてカヌードスの乱を取材する機会を得たのである。この取材に基づいて書かれたのが『オス・セルトレイス (奥地)』であって、彼の著作中この一冊が際立っている。
- (5) グラッサ・アラニャは、1868年、マラニョン州首都サンルイスの旧家 —母方のおじは帝制時代の男爵であり、父は新聞記者であった— に生まれ、貴族やヨーロッパ人たちと親しく生活を共にし、思想面では、ジョアキン・ナブコ (Joaquim Nabuco) の影響を受

けた。また幾度もヨーロッパの文化都市パリ、ロンドン、ローマなどを訪れ、マッシャード・デ・アシス (Machado de Assis) のようなヨーロッパ文化指向型の教養人であったが、他方では、当時の典型的なブラジルの知識人でもあったわけで、ブラジルがその熱帯的環境に基づいて「奥地」の精神を発展させることを望んでいたといわれる。「近代芸術週間」で有名な1922年には、ブラジルの近代主義運動を指導し、1931年、リオ・デ・ジャネイロで死亡した。なお、『カナアン』執筆に際しての資料は、トビアス・バレット (Tobias Barreto) が著わしたエスピリトサント州のドイツ系移住地ポルトドカショエイロ (Port do Cachoeiro) における開拓移民の生活記録に基づいている。

(参照：Alphonsus de Guimaraens Filho, “Graça Aranha e Canaã” In : Canaã, Biblioteca Manancial — RJ, 1976. PP.13 ~ 17.)

- (6) モンテイロ・ロバートは、1906年、サンパウロ法科大学を卒業し、翌1907年にアレイアス (Areias) で検事を務めた。そしてサンパウロ州奥地の小都市で生活しながら、ひんぱんに新聞や雑誌に投稿した。1911年、おじの死によってブキラ (Buquira) 農園の所有者となった。1917年に農園を売ってサンパウロ市に移り、そこで Revista do Brasil 社を購入し、これを彼が社長として Monteiro Lobaró & Cia 社版社に改名して、1918年以来、『ウルベス』その他を出版する。この会社は、後に Campanhia Editora Nacional に成長した。ここで注目すべきことは、従来、書籍の出版は、ポルトガルでのみ行なわれていたことである。1921年以後は児童文学の執筆に専念し、1948年にサンパウロ市で死亡するまで20を超える作品を残しており、特に1943年には彼個人の全集を出版するために新たに Editora Brasiliense を設立している。
- (7) マリオ・デ・アンドラーデは、1893年、サンパウロ市で生まれ、1945年に同地で没している。サンパウロ演劇音楽学校 (Conservatório Dramático e Musical de São Paulo) で学び、1922年以降は同校で音楽史を教える。またリオ・デ・ジャネイロ大学の芸術部長を務め、同時に芸術学を講じた。1928年の『マクナイーマ』で

は、サンパウロへの愛から出発してブラジル全体への愛に至り、これは、ブラジル近代主義文学を代表する国民主義的作品となった。アンドラーデは、ブラジルの言語をめぐって近代主義論争をまきおこし、彼の諸作品においては、文体上の問題がきわだっていた。

(8) 参照：Carlos Heitor Castello Branco, *Meio Século de Macunaíma*, Editora do Escritor — São Paulo, 1976. PP.5 ~ 6.

おわりに

以上、本稿で取り上げた諸作品を通じて感じられる諸点を、筆者の立場から観察すれば、次のように指摘することができる。

まず第一には、すべての作品において、地方主義的傾向が強く見られることである。すなわち、どの作家にあっても、ブラジル各地方の旧文化を温存し、植民地時代よりの伝統を固守しようとしていることが理解される。

第二番目は、リオ・デ・ジャネイロおよびサン・パウロを中心とした都市主義である。これは上記の地方主義に対立するものではあるが、各作家の教育および生活環境を反映して共通に存在するものであり、その理念的目標は、近代化的統合主義であるといえる。

第三としては、上記の二要素の混淆を通じて、「ブラジリダーデ」を形成せんとする強い意図が、多くの作品に感じられることであって、その代表的作品がサン・パウロを中心とした近代主義運動の産物のひとつ『マクナイーマ』である。

第四は、大衆主義である。これは『コルチッソ』から『早魃下の生活』までの全作品を通じて、使用言語および作品の主題の両面にわたって現われている。本稿ではヴァルガス自決後の1954年以後の作品には触れてはいないが、この大衆主義は、後のポプリズモ、さらには1964年の革命政府の出現などに関連してゆくものである。

以上の四点は、ここで扱った文学作品から引き出される見解ではあるが、このことから「ブラジリダーデ」を理解するには、当時の社会状況の反映である文学作品を取り上げる必要があることを痛感するものである。

最後に、本稿においては、1890年から1938年までの長期間にわたる

多様な作品を取り上げて検討してきた関係から、種々の脱落のあることを筆者自身、感ずるものである。この点については、多くの方々の叱正を待って後日改めて修正してゆきたい。

調査したテキスト

1. Aluizio Azevedo, O Cortiço. Edição de Ouro, s.d.
2. Euclides da Cunha, Os Sertões. 1ª ed., Editora Cultrix - SP, 1973.
3. J.P. de Graça Aranha, Canaã. 2ª ed., Editora Lova Aguilar - RJ, 1977.
4. Monteiro Lobato, Urupês. 20ª ed., Editora Brasiliense - SP, 1976.
5. Mario de Andrade, Macunaíma. 14ª ed., Livraria Martins Editora - SP, 1977.
6. José Américo de Almeida, A Baçaceira. 13ª ed., Livraria José Olympio Editora - RJ, 1974.
7. Rachel de Queiroz. 22ª ed., Livraria José Olympio Editora - RJ, 1977.
8. Gilberto Freire, Casa Grande e Senzala. 11ª ed., Livraria José Olympio Editora - RJ, 1964.
9. José Lins do Rego, Menino de Engenho. 23ª ed., Livraria José Olympio Editora - RJ, 1977.
 - Doidinho. 14ª ed., Livraria José Olympio Editora, 1977.
 - Moleque Ricardo. 10ª ed., Livraria José Olympio Editora, 1976.
 - Usina. 7ª ed., Livraria José Olympio Editora, 1973.
10. Jorge Amado, Cacau. 22ª ed., Livraria Martins Editora, 1970.
 - Suor. 21ª ed., Livraria Martins Editora, 1970.
11. Graciliano Ramos, Vidas Secas. 36ª ed., Editora Record - RJ-SP, 1977.

参考文献

1. チャールズ・ワグラー（山本正三訳）『An Introduction to Brazil』二宮書店、1971。236～264ページ。

2. J. フランコ (吉田秀太郎訳) 『ラテン・アメリカ —文化と文学』
新世界社, 1974年。
3. 川崎桃太「国民性および国民願望に就いての考察」—José Honorio の
“国民願望”をめぐって』『COSMICA』(京都外国語大学)第Ⅱ号,
1972年。
4. 齊藤広志・中川文雄「ラテン・アメリカ現代史 I 総説・ブラジル」
山川出版社, 1978年。221~241ページ。
5. 山田睦男編「現代ブラジルの社会変動」アジア経済研究所, 1975年。
99~139ページ。
6. 拙稿「“ブラジル語法”と<弱勢代名詞の位置>とについて」『COSM
ICA』第V号, 1976年。
7. 拙稿「ブラジルにおけるポルトガル語 —その文化的様相に関する一試論
」『COSMICA』第VI号, 1977年。
8. E. Bradford Burns, *Nacionalism in Brazil*. New York, 1968.
9. Afranio Coutinho, *Introdução a Literatura no Brasil*. 7^a ed., Rio
de Janeiro, 1972.
10. — (Direção de), *A Literatura no Brasil*. vol. V — “Modernismo”.
Rio de Janeiro, 1970.
11. Jacinto do Prado Coelho (Direção de), *Dicionário de Literatura*.
vol. 1 e 2. Porto, 1969.
12. Sérgio Buarque de Hollanda (Coleção), *História do Brasil*. 2
vols. (3^a ed.,) São Paulo, 1972
13. Roberto C. Simonsen, *História Econômica do Brasil (1500 - 1820)*,
São Paulo, 1969.
14. Cassiano Ricardo, *Marcha para Oeste : A influência da “Bandeira”
na formação social e política do Brasil*. vol. 1 e 2. Rio de Ja-
neiro, 1970.
15. Mário da Silva Brito, *História do Modernismo Brasileiro : ante-
cedentes de Semana de Arte Moderna*. 4^a ed., Rio de Janeiro, 1974.